

平成25年度「地域・学校防災教育セミナー」実施状況

日 時 平成25年11月27日（水） 13:15～16:55
 場 所 千葉市文化センター アートホール
 参加者 259名

1. 実施概要

平成25年度は、危機管理教育研究所の国崎代表に地域における防災教育について、御講演いただきました。

また、命の大切さを考える防災教育公開事業（県教育庁事業）を実施した小中学校、高校及び特別支援学校の8校による事例報告の発表がありました。

発表後は、国崎代表による講評のほか、来場者との意見交換が行われました。

プログラム

No.	演 題 等	講師及び発表者
1	講演 「地域における防災教育 ～地域と学校で防災力を高めよう～」	危機管理教育研究所 代表 国崎 信江 氏
2	防災教育モデル事業事例報告	
	（1）自助・共助の意識を育てる防災教育の展開と避難所設営に係る学校のかかわり方の追求 ～地域・関係諸機関との連携を通して～	多古町立久賀小学校 教諭 下河邊 佳延 氏
	（2）命の大切さを考える防災教育 ～地域と連携した防災教育の推進～	市原市立白金小学校 校長 土田 雄一 氏
	（3）災害時に地域で役立つ人材の育成 ～実践的な訓練を通じた自助・共助の意識向上～	船橋市立湊中学校 教諭 永井 弘之 氏
	（4）自己判断力を高め、たくましく行動する生徒の育成 ～正しい知識と経験の積み重ねの中で～	九十九里町立九十九里中学校 教諭 川嶋 孝之 氏
	（5）高校生の防災意識 －引き渡し・帰宅困難－	県立千葉高等学校 教諭 藤原 明夫 氏
	（6）地震と津波について	県立安房拓心高等学校 教頭 浅野 照久 氏
	（7）備え、積み重ね、守ろう ～地震・津波を知り、大切な命を守る取組～	県立長生特別支援学校 教頭 前橋 純一 氏
	（8）自らの命を守る防災教育 ～危険を予測し、主体的に行動する態度の育成をとおして～	野田市立山崎小学校 資料配布のみ
3	講演者による事例報告の講評及び質疑応答	講師及び発表者

講演『地域における防災教育 ～地域と学校で防災力を高めよう～』

危機管理教育研究所代表 国崎信江 氏

- 新しい知見から防災を考え、いつまでも時代遅れの防災教育、防災対策をしたところで、命が守れないことに気付いてほしい。皆さんが胸を張ってやってきたことがより一層効果的な内容になるように願い、科学的根拠に基づいてお話しする。
- 学校で行われている避難訓練は、訓練に参加している児童生徒及び先生方全員が生きているという前提の震度4や5のレベルの訓練をしている。いつまでもこのような訓練をするのではなく、ハザードマップや自治体の被害想定で示されているレベルの訓練をしなければならない。
- 首都直下地震はM7.3が想定されているが、いままでの防災対策、防災教育で子どもたちの命を守ることが出来るのかを考えてもらいたい。この揺れで、生き延びることそのものが非常に厳しい。その中で全員が生きている、怪我をしていないことを前提に震度4ぐらいのレベルの訓練をしていて、生き延びることが出来るのか。

低いレベルの訓練を何回やってもその効果は表れない。想定外の事態を減らすために訓練内容もレベルアップしていかなければならない。もはや防災対策・教育の必要性を訴えている場合ではなく、それは当然のこととして今はそのレベルを上げていかなければならない時期にきている。

- 我が国の防災対策は、そもそも火災から始まっている。火災の訓練では外への避難は当然だが、それがいつしかすべての災害において外に避難という形式が定着している。「有事には避難」というのが擦り込まれているために地震が発生したら避難しなければ落ち着かないという心理状況にさえなっている。避難すべきかどうか、避難するなら屋内の上階か外のどちらが適当かなどの判断させる教育も必要だ。
- 建物の耐震化率が上昇しているにも関わらず、防災訓練は進化せずいつでも避難訓練がメインになっている。学校の避難訓練では、児童生徒が校庭や体育館に避難するが、廊下、階段を通過して避難するのには多くのリスクがある。
- 東日本大震災では、建物被害はあまりなかった。これから経験する首都直下型地震は、低層中層に最も影響を及ぼす揺れを伴う。より一層建物に対する耐震化を進める必要がある。
- 一方で、建物さえ耐震化していれば、この学校は大丈夫だという先生と保護者がいる。耐震基準のないガラス、壁材や



天井材などの非構造部材の被害にも目を向けてほしい。窓ガラスが割れたり廊下においてあるものが倒れることもある。そこを児童生徒が乗り越えて避難すれば転んで怪我を負うかもしれないし、校庭と校舎の間に亀裂が発生することや、液状化による被害で結局校庭に出られないことも。そのようなリスクを負ってまで、校庭に避難させる必要があるのかということを考えていかなければならない。耐震性のある学校では、教室にとどめた方が安全かもしれない。避難訓練も大事だが、避難しない訓練もしておけば、いざという時にどっちをすればいいのか判断できる。避難訓練ばかりだとイメージがわからず、自分の行動に自信が持てない先生がでる。

体育館も同様に、地域住民は耐震性があれば、避難所として使えると考えているが、窓ガラスや天井材の耐震性についても事前に確認しておいた方がよい。

- 家庭における災害対応、備えはすべて同じではない。戸建てなのか集合住宅なのかの居住形態によって防災対策は異なる。

耐震構造のマンションでは、一般的に階層が上がれば上がるほど被害が大きくなる。これを踏まえれば1階と10階の居室の防災対策が同じであるはずがない。現状の防災教育では何れも同じ指導が行われている。自治体が出している防災のパンフレットや一般の防災書籍は戸建ての防災対策が書かれていることが多いのを留意してほしい。それを知らずにマンション居住者が同じように防災対策を進めたところでかえって被害を拡大させることもある。

戸建とマンションの退避行動の違いは、戸建は家具の移動範囲がさほど大きくなく、固定されていないテーブルの下に逃げることもできる。ところがマンションの高層階では、テーブルが激しく動くので、下にもぐることもできない。壁に当たって跳ね返ったテーブルが自分を襲うことにもなる。マンションの場合はテーブルの下にもぐろうとするよりは、固定された丈夫なものにしがみつかないと体が床を転がり負傷することを知ってほしい。

家具は高いものが危険で低いものなら比較的安全という考えがあるが、そんな単純なものではない。フローリングという滑りやすい床材の条件でキャスター付家具がロックされていない状態では家具が部屋中を暴走することになる。背が高い家具が危険で、低い家具が安全という教育ではなくて、条件によってどういう被害が起こり得るということを知った上で、地震が発生した場合に判断できるような力をつけさせなければならない。この映像からも何が危険かを判断できるような知識を持っていただきたい。



○ 防災教育の弊害で、地震が起きたら机の下にもぐれと言っているが、地震の揺れによって、机が倒れたりして、もぐれない状況だと、児童生徒はどうしていいか分からなくなる。机の下にもぐれでなく、体を守れということに変える（手段ではなく目的を教える）だけでいい。体を守る方法はいくらでもある。いままでどおり机の下にもぐるのもいい。机が危険だと感じた生徒は、教科書でもカバンでも、何ものあれば自分の手でもいい。このような状況に自分はどのように体を守っていくかという応用のきく教育をしていかないといけない。

○ 近年、建築物の高層化が進むにつれ、上から物が落ちてくるリスクが増えている。ヘルメットをかぶっていれば、ある程度は守れるが、防災頭巾ではどうか。多くの人はないよりましだという。火災の訓練で防災頭巾をかぶせる理屈は通る。しかし、実験から理解いただけるように1 m上から物が落ちただけで頭部に損傷を与える防災頭巾を地震の訓練でかぶせるのは理解できない。先進国で子どもに防災頭巾をかぶせているのは日本だけだろう。

東日本大震災以降、少しずつではあるが、園や学校で防災頭巾からヘルメットに切り替わってきている。しかし、まだ防災頭巾が普及している実態がある。



○ 災害時の身の守り方で、四つん這いで頭を守る団子虫のポーズを推進しているが、物が落ちてきて下敷きになった場合、唯一自力で脱出出来るポーズで、生き延びる確率が上がる。とっさにこのポーズが出来るよう、日頃から伝えてほしい。

○ 自助として、まずは自宅の耐震化を進めてほしい。高齢者など地震で死ぬのも運命だという人がいる。地震による建物の倒壊で生き埋めになった場合、地域の方が命をかけて救いに来るかもしれない、また、倒壊によるがれきで道路をふさぐかもしれない。また、そこをたまたま通っただけでそのがれきの下敷きになる人がいるかもしれない。その意味で私たちはみな運命共同体である。自分だけほっといてくれでは済まされない。地域住民全員が耐震化すればおのずと町は災害に強い街になり被害を大きく軽減できることから、自宅の耐震化に向き合ってもらいたい。地域の子どもたちが安心して外で過ごすことができるように自宅の耐震化を考えてほしい。

○ 児童生徒は、学校にいる時間や家にいる時間ではなく、登下校時など自分ひとりでいるときに起きる地震が怖いという。ひとりでいるときに生き延びるための知識や技術を教えている学校はどれだけあるか。そういう意味で子どもが一番必要としている自分の身を自分で守らなければならないという厳しい条件の中で答えを導いていく防災教育に必要である。

- なぜ、今の防災は避難することありきなのか。非常品は持ち出すことありきで非常持出袋の中身を考えるなど避難することを前提にした防災を考えているが、理想とするのは災害リスクの少ない家に住むことであり、逃げることを必要としない家に住むこと、そこで継続して生活することが理想である。自宅を捨てることを当然とするのではなく、自宅で継続して生活することを主軸に防災を進めた方が良い。

危機管理教育研究所ホームページ

URL : <http://www.kunizakinobue.com/>

防災教育モデル事業事例報告

学校種に応じた地域との組織作り、防災訓練、防災教育の実践の取組が下記のホームページで紹介しています。

URL : <http://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/anzen/saigai-anzen/index.html>

千葉県ホームページ：ホーム > 教育・文化・スポーツ > 教育・健全育成 > 学校教育 > 安全・保健・給食 > 学校安全 > 災害安全



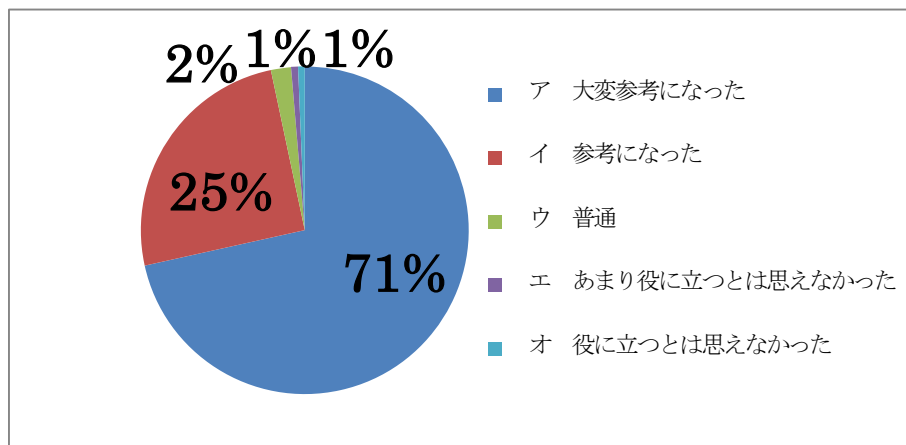
2. アンケート結果

「地域・学校防災教育セミナー」の参加者に対して、今後の参考とするため、セミナーの内容等について、アンケートを実施しました。

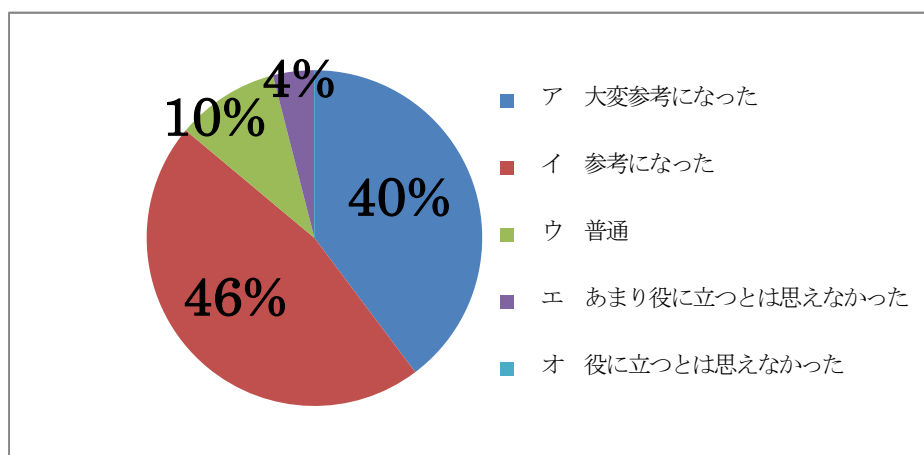
結果は以下のとおりです。

(1) セミナーの内容について

ア 講演



イ 防災教育モデル事業事例報告



(2) 本日のセミナーについての感想や要望、東日本大震災後における地域防災への取り組み、新たなセミナーについての希望等について、あなたが感じたことをご記入ください。(抜粋)

- ・防災教育の重要性がますます高まっている。更なる取組が必要。
- ・地域・学校で根強く防災教育を継続する重要性を感じた。
- ・巨大地震による家屋被害や火災、ブロック塀の倒壊などどう対策するか、もう一度みんなで考え直します。
- ・高度な知見を伺い自分自身の為になった。地域活動に展開していきたい。
- ・学校・地域・行政が連携し、同じように意識を高く持って備えることが大切。
- ・防災も減災もハードの強化はもとより、ソフト面の工夫が大切だと痛感した。
- ・防災・減災活動は、災害発生の地域特性と個々の居住環境の特性をしっかりと把握することが肝要だと思った。特に防災訓練は災害の種類、時刻、強度等の想定を徹底することが重要。
- ・自主防災組織の一員として、地域の中で取り入れていきたい。
- ・大変分かり易く、今後の指導に役立つ。
- ・講演を聞いて衝撃を受けた、考え直さなければと思った。
- ・新たな角度・視点でとても有意義だった。
- ・とても印象に残ったのと同時に、防災教育をどう推進していけばいいのか難しいと感じた。児童生徒の引渡から、学校にとどめておく方が安全を確保出来ることもあり、被災した際の判断が重要と感じた。現場でなにが出来るかを考えていきたい。
- ・防災対策の質的向上の必要性が分かったが、具体的にどうしたらいいのか分からない。自分さえ生きてないかもしれないのに、助けを待っている人はどうなるのか。
- ・自主防災組織として参考になったが、具体的な対処方法を知りたかった。
- ・一般参加だが地域社会とのつながりがすばらしい学校があり参考になった。
- ・地域と学校の綿密な連携の必要性を強く感じた。
- ・子どもたちに自分の身は自分で守る意識をどう付けていくか考えていきたい。
- ・陸地や海側など学校によって、地域防災の考え方が違うことを理解した。行政の一律な方針はあくまで基本的な考え方である。
- ・時間の関係で駆け足だったのが残念。
- ・内容が充実しているので、午前中からの1日研修で実施してほしい。
- ・地域性や住民性から、各ブロックに分けて開催してほしい。
- ・自助・共助・公助をさらに地域と一体となって考える余地あり。